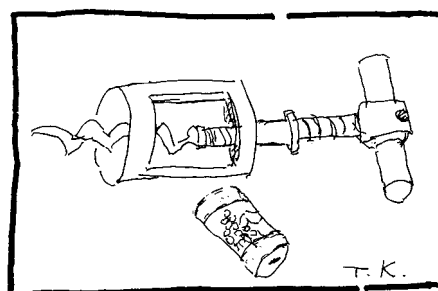


# OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C O N T E N T S

図書館長就任あいさつ〔清水 章〕	2
統合医療からホリスティック医療へ〔黒岩敏彦〕	3
第1回「赤穂市民病院祭」に想う - 21世紀の医療環境(11)〔牧 彰〕	4
町の小さな本屋さん〔山川由加〕	5
図書館利用状況	6
他大学図書館訪問記(15)(大阪体育大学図書館の巻)	8
書評「ヒトゲノム」〔和田 明〕	9
本学教職員著作寄贈	10
お知らせ	10
平成13年度図書館統計	11
図書館業務日誌	12
編集後記	12



## 図書館長就任挨拶

### ITの時代

清水 章



本学図書館は、外観、内容、運用、利用率の全てがAクラスであり、学内外の高い評価を受けています。これは歴代理事長、学長、館長、図書館職員始め、関係各位のたゆみないご尽力の賜物であります。このたびの館長拝命は私にとって身に余る光栄であり、責任の重さをひしひしと感じております。昭和5年図書室設置以来今日までの、輝かしい伝統を継承し、さらなる発展に力を尽くしたく思います。先日館長室に初めて行って見ますと、歴代館長の写真がずらりと掲げられており、歴史の重さに身が引き締まる思いがしました。

今、医療改革の時代と言われる。この数ヶ月、ヒト胚性幹(ES)細胞移植のニュースが途切れなく流れている。遺伝子技術による診断は日常のものとなったし、臓器移植、再生組織移植も一般的になりつつある。あらゆる医学分野で、最新の進歩が診断治療に生かされようとしている。また、人権意識が高まって、カルテ開示、インフォームドコンセント、セカンドオピニオンなど数年前には聞かれなかった言葉が急速に常識になった。一方、医療費が増大し、保険点数が下がり、保険料負担が増え、これらが病院経営を圧迫している。医学教育改革の流れもまた激しく、学生が自ら問題を把握し、それを解決できる能力を養うこと、患者様の身になって考える医の心を育むことが教育の目的であるといわれる。そのために推奨される手段は、伝統的方法を否定し、PBL, Tutorial, OSCE, SP, Clinical Clerkshipなどであり、まだ一般的な日本語訳さえない。卒後教育にあっては、研修医が医局に所属する旧来のシステムは一掃され、スーパーローテーションが義務づけられる。さらには専門職大学院の法制化も間近いと報じられている。このような医学・医療・医学教育・医療経済激動の時代に合わせて、図書館運用にも変化が生じよう。

医学医療の指導的立場にある大学医学部にあっては、図書館はこれまでずっと、臨床、教育、研究のかけがえのない支えであった。最近変わってきたのは、主要雑誌の最近発刊号や有名教科書がパソコン画面で読めるようになったことである。Harrison's Principle of Internal Medicine 15<sup>th</sup> Edition のCD-ROMをセットすると、各ページを見ることができ、インターネットがつながってあれば、引用文献のフルテキストを見ることができる。例えばHIV抗体検査が陽性であった場合、この検査の陽性予測値(検査が陽性であったときに本当に病気である確率)はいくらか。重大な情報であるが、意外に知られていない。数回クリックすることによりその答えを引き出すことができる。数年前、一人の学生がHarrisonをコピーしたいが分厚いのでページの端がコピーできないといって困っていたが、今、CD-ROMからプリントアウトすれば問題ない。一方Cecil Textbook of MedicineはMD Consult(医学情報コンテンツ)に含まれる主要参考書であり、これは本学図書館が年間契約しているので、学内からパソコンを通して、だれでも、読むことができる。エビデンスに基づく臨床判断の信頼おける手軽な情報源であろう。現在、和洋含めて本学図書館に、CD-ROMつき図書はかなりあり、今後、利用率の向上が望まれる。

本学図書館経由のフルテキストで見られる電子ジャーナルは現在、約1000種類あり、E-メールでの配信サービスに個人アドレスを自分のよく読む雑誌に登録しておく、発刊と同時に通知が届く。雑誌が到着するより半月程早く、いながらにして読むことができる。論文の投稿や校正、学会の演題申込みもオンラインが主流である。学会主催者は、UMIN(大学病院医療情報ネットワーク)に依頼することにより、演題募集のオンライン業務の提供を受けることができる(無料)。E-メールのやりとりとホームページ作成ができれば抄録の編集は、自分でできるので、サポート業者への依頼は必要ない。学会当日はスライドではなく、ノートパソコン或いはCDを持参しパワーポイントで投影するようになりつつある。ただ残念なことは、図書にしてもプロジェクターにしても、病理組織像やレントゲン写真にはまだまだ不十分である。本学でも病理学の重要専門誌を一度電子ジャーナルのみにしたが、オンラインでは、写真の質が悪いので、雑誌購読を復活した例がある。

情報技術(IT)の臨床、教育、研究への利用の仕方はどんどん進んでおり、それらを有効に取捨選択し、取り入れることに機敏でありたい。図書館がIT利用の手助けをすることが新しい時代の要請である。

(しみず・あきら 病態検査学教授・中央検査部部长)

## 統合医療からホリスティック医療へ

黒岩敏彦

近年、代替医療なるものが注目されています。現代医学は科学に裏打ちされた西洋医学が主流で、それによる医療に替わるものあるいは補うものとの意味です。Alternative medicineの和訳ですがcomplementaryという言い方もあり、こちらは補完と訳されています。あるいは、併せてcomplementary and alternative medicine (CAM)とも言われ、日本語では補完・代替医療となります。お国柄の違いか、北米ではalternative、英国ではcomplementaryが使われるようです。CAMは共通して使われるようですが、名称はともかく目指すところはintegrative medicine (統合医療)です。統合医療とは、伝統医学(中国医学、インド医学、チベット医学、ユニナ医学など)や民間療法や食養生法などを含めた代替医療と西洋医学との統合という意味ですが、単にこれらを合わせるというのではなく、お互いの長所・短所を組み合わせる新しい医療を構築しようとするものです。漢方・和方・鍼灸・柔道整復などを伝統的に行ってきた日本から起こって欲しかった考え方です。この統合医療の先にあるのが、心の問題をも含めて患者さんを全人的に診ようとするホリスティック医療であると思います。米国では既に、1978年ホリスティック医学協会ができていますし、10年ほど前から米国民が代替医療に支払う費用が西洋医学の施設に支払う金額を上回っているようで、1992年にはNIHに代替医療研究室が設立されています。日本でホリスティック医学協会ができたのは1987年で、やっと1998年に日本代替医療学会(2000年には日本補完・代替医療学会と改称)と、日本代替・相補・伝統医療連合会議が発足しました。欧米に10年ほど遅れていますが、近年これに興味を抱く医師が増えているのは嬉しい限りです。

私自身も以前から唯物論に根ざす西洋医学の限界を感じ、こういう領域の発展を望んでいました。あまりにも自分自身に無知すぎ、人間の本质を知らずに作られた近代科学は失敗しつつあるとはアレキス・カレルの言葉ですが、彼の言葉を引用するまでもなく、西洋医学の限界を感じている人は増えているのではないのでしょうか。今ほど西洋医学が進歩した時代はありませんが、病める人は益々増加していますし、原因不明の疾患も新たに出現しています。機械論・心身二元論で論じたからこそ西洋医学はここまで進歩したのかも知れませんが、医療現場にこの考えを持ち込むのは基本的に間違っていると感じています。村上和雄氏も、遺伝情報を研究していくとsomething greatの存在を感じざるを得ないと述べていますが、生命は単に偶然湧いてきた肉体だけの存在ではなくて、心があり魂があり複雑系なのです。Psycho neuro immunology (精神神経免疫学)という分野が注目されており、Brain, behavior, and immunityやPsycho-Oncologyといった雑誌も発行されています。今後の発展に期待したいと思います。

日本で西洋医学が採用されたのは明治時代の西洋医学採用令によりですが、折しも日清・日露戦争時代であって西洋医学の最も得意とする外傷外科が威力を発揮し、大きくこれに影響したことは否めません。しかし、西洋医学が対称とするのは疾患であって、これを患う個人の差を認めず、同じ疾患なら治療法は同一です。従って、 $n$ (数)を増やした統計で個体差を無くす必要ができません。一方、伝統医学などの代替医療は患者さん一人一人の個性を尊重し、それぞれに応じた治療法になります。その分、西洋医学の求める普遍性が無くなります。さらに、西洋医学を納得させる理論や客観性はないかも知れませんが、現代科学が未だその理論を検証できないだけかも知れませんが、全く無意味な伝統医学が何千年も続く筈がないのです。

自分の専門分野ではありませんし限られた紙面でするので間違いや言葉足らずがあるかも知れませんが、要するに、近代西洋医学の行き詰まりを感じ、人間を肉体と精神に分ける二元論的な考えから、心身一如とみなす東洋思想に期待したいと思っています。21世紀に入って、遺伝子操作や再生医療などのbiotechnologyの分野が益々発展しています。一方で、伝統医学などを代替医療として見直して西洋医学との統合を図ろうとする考えが起こってきています。大学の再編時代にあって本学の将来像を考える場合、一つの方向として念頭に置いておきたいと思います。

(くろいわ としひこ 脳神経外科学教授)

# 第一回「赤穂市民病院祭」に思う - - 21世紀の医療環境 (11) - -

牧 彰



患者・医療スタッフと一般市民が心から共感した  
[赤穂市民病院祭]

邊見公雄院長宿願の、そして、多くの地域住民待望の第一回 [赤穂市民病院祭] が開院50周年行事として、平成14年の2月11日(改築開院記念日)に開催されることを知り、当日は地域住民と一緒に初めて [市民病院祭] を大いに祝し、終日晴れやかな時空を市民と共有してきました。

健常者(医療スタッフなど)・弱者(患者など)を問わず、また、幼児からお年寄りまでの一般市民が、「病院であそぼ!」のキャッチコピーに誘われて、五感(視・触・嗅・味・聴)や第六感(直観)などの人が持てる知覚の全てを駆使し、「歌い、笑い、食べ、聴き、感じ」ながら院内の各所で現代医療の現場や療養環境などへの見識を大いに深めました。

院内の女性同好会による真っ赤な揃いの法被姿も凛々しい和太鼓 [ゲンキ] の演奏にはじまり、続いて託児所園児たちの見るからに愛らしいお神輿演技は自ずと観衆の頬を緩ませ、次々と演じられた内外ボランティアによるマジックショー・コント・コーラス・フォークソングなどは、駆けつけてくれた地域住民を大いに魅了したことでした。

俄仕立ての模擬店では、医師などが馴れない手つきで焼蕎麦を捌き、看護婦などがお汁粉を盛り付けては来客を精一杯もてなしました。各種のアトラクションや模擬店の他にも、医療や薬の無料相談・体験コーナー・パネル展示等々多彩で、あたかも医学系大学の学園祭そのものの様相でした。私には4年前の [一般市民閲覧会] 時と自ずとイメージが重なり、移転開院直前の新病院を閲覧にこられた一般市民などをご案内したことなどが懐かしく偲ばれました。

病院側の発表によれば、およそ五千人(市人口の1/10)に及ぶ一般市民が小雪まじりの強風に苛まれたにもかかわらず、また、病気でもないのに来院されて、初めて催された「赤穂市民病院祭」を祝福し大いに雰囲気盛り上げてくれました。赤穂市民病院建設に熱い想いを託した一人としては自然と目頭が熱くなり、この施設的设计者としての誇りをこの時ほど感じたことはありませんでした。

施設的设计者としては、赤穂市民病院が心の通う地域医療の中核施設としてその物理的寿命が尽きるまで邁進し、今後とも地域住民に愛され親しまれ、いつまでも「市民のための、市民による、市民の病院」たることを切に願うものです。

本人の意志に関係なく「病院で生まれ 病院で死ぬ」宿命を負わされている現代人にとって、病院はまさしく [人生の縮図] であり、健常者と弱者が共存する [社会の縮図] でもあります。従って、医療施設は単に無機質な身体修理工場などでは決してなく、病院こそは人の喜怒哀楽が直に息づく有機的生命体であり、全地球よりも重い個人の生命を守り、病んで傷ついた心身を癒す [小宇宙] そのものであるといえます。

医療施設こそは、[共生の世紀]・[人権の時代]を標榜する21世紀社会の象徴的中核施設であり、これからの病院は地域住民に適切な医療情報を率先して発信するコミュニティセンター(交流施設)としての役割を担い、私たちは病気を治すためだけでなく病気にならないために通院することになるでしょう。誰もが差別されることのない健全な福祉社会創生のためには、医療は人の幸せを追及する [究極のサービス業] であり、病院こそは人の営みに最も密着した [究極の公共的建築] でなければならないのです。

第一回 [赤穂市民病院祭] は、赤穂市民病院が真に地域に密着し愛され親しまれる医療施設であるためのまさに正鵠を得た貴重な布石であるといえるでしょう。地域住民との交流を意図した今回の [市民病院祭] は、かくして大成功裡に幕を閉じました。私も嬉しいことに、大いに癒され励まされて帰途につくことができました。赤穂市民及び地域住民の皆様、この度は有難うございました。真に心の通う地域医療のために、今後とも私の [赤穂市民病院] を末永くご愛顧下さりますよう宜しくお願いします。

(まき・あきら 元日建設計社員、本学総合研究棟・本館・図書館棟設計担当)

## 町の小さな本屋さん

山 川 由 加

私は本が好きだ。正確に言うと本を買うのが好きなのかもしれない。まずスタイルを整えてからでなければ事を始められない性分の私。そう言えば、エアロビクスを習い始めた初日にレオタードを着ていたのは私だけだったし、一度行ったきり二度と行くことのなかったスキーのために、上から下までウェアを揃えてしまったこともある。そのウェアは今では嵩張る我が家の邪魔物となっている。本も御多分にもれず、まず買ってしまおう。全六巻の本は、六巻全部買ってから読み始める。受験勉強は参考書と問題集を一通り買い漁る事から始めた。スタイルを整えることで気分を高め、やった気に、いや、やる気になるのだ。教員になった今も、講義準備のための参考文献を全て買い揃え、気分を高めたいところだが、如何せん高価な本ばかりなので、図書館のお世話になっている。

母に言わせると、子どもの頃の私は玩具屋さんの前でなく、本屋さん前で「買って、買って～」と駄々を捏ねる子だったそうだ。その駄々捏ねの舞台となっていたのは、当時私の住んでいた小さな田舎町に一軒しかなかった、これまた小さな本屋さん。

その名を『橘高書店』といって、文房具屋も兼ねていた。今で言うファンシーショップの役割も果たしていたそのお店は、放課後の女の子達の溜まり場でもあった。少ないお小遣いの中から、かわいい消しゴムや鉛筆キャップを買っては、自慢し合ったものだ。もちろん、本も買った。その多くは月刊誌で「しょうがくーねんせい」から、二年生、三年生、四年生と段々成長し「中一時代」や「セブンティーン」など。町の小さな本屋さんは、子ども達の成長をその子が手にした本のタイトルによって把握していたに違いない。こんな風に書くと、まるで雑誌しか読んでいなかったかのように思われるかもしれないので、念のため言っておくと、ちゃんとした本も買った。

新しい本の匂い、本の匂いというよりも本を入れてセロハンテープで封をしてくれた、あの紙袋の匂いが大好きだった。どこか甘い焼きたてのパンの匂いにも似た、(と思うのは私だけだろうか)あの紙袋の匂いを嗅ぐと、なんだかワクワクしたものだ。今、手にしているこの紙袋の中の本には、既にストーリーが全てある。ストーリーは、手のひらの上に全てのっかっているにも関わらず、一枚一枚、ページをめくらなければ先のことは何一つわからない。当たり前だけれど、子どもの私にとってはちょっと不思議な感覚であったのを覚えている。

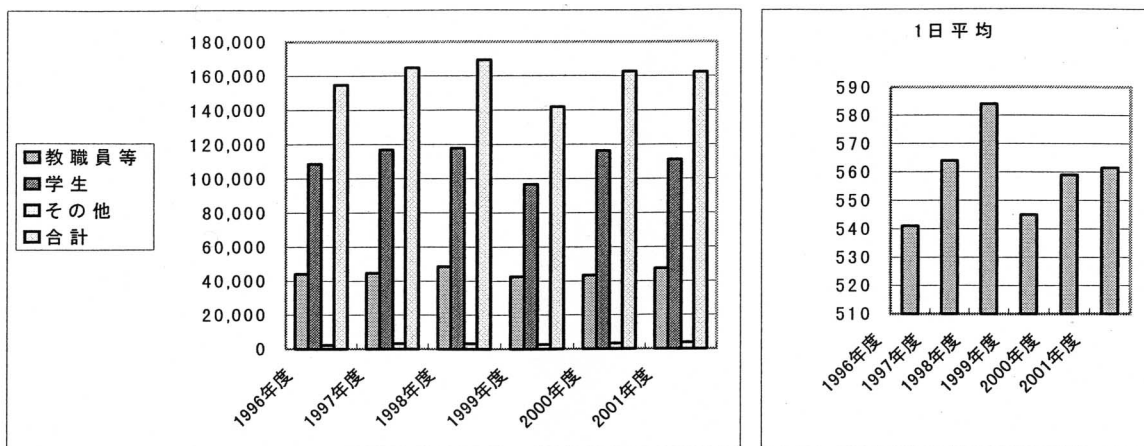
ところで、最近の本屋さんの紙袋の匂いは昔のようにいい匂いではなくなってしまった。それどころか、ビニール袋になってしまった本屋さんも多い。これは私にとっては寂しいことだ。そのせいという訳ではないが、実は最近あまり本屋に足を運んでいない。我が家には2才になる娘がおり、母の買い物には漏れなくこの娘が付いて来る。おちおち本屋なんて入れない。読みたいと思っている本はたくさんあるのだが、仕事と育児の間で忙殺され読めないでいるのが現状だ。時間とは自分で作り出すものなのだろうが、娘を寝かしつけてから、あれとこれと・・・と思いながら、気が付くといっしょに寝てしまっている毎日。規則正しくも情けない一日の終わりを迎えている。

今度帰郷したら、実家の母に娘を預けて『橘高書店』に行ってみよう。いつか、自分のための時間がゆっくり持てる日が戻ってきたら、読書に耽れるようにその日を夢見て、とりあえず本を買っておこう。あの本屋さんならもしかするとまだ、いい匂いのする紙袋に本を入れてくれるかもしれないし・・・

(やまかわ・ゆか 看護専門学校専任教員)

# 図書館利用状況

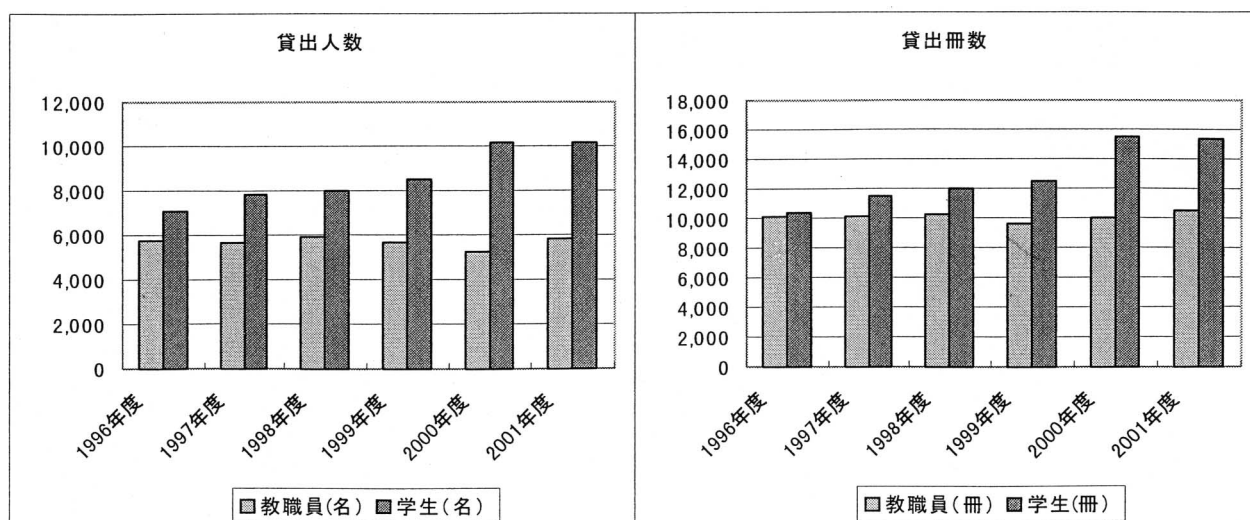
## 1. 入館者数



	教職員等	学生	その他	合計	1日平均
1996年度	44,001	108,530	2,220	154,751	541
1997年度	44,672	116,922	3,224	164,818	564
1998年度	48,451	117,799	3,182	169,432	584
1999年度	42,648	96,546	2,730	141,924	545
2000年度	43,180	116,293	3,299	162,772	559
2001年度	47,264	111,268	3,728	162,260	561

この6年間の入館者の推移です。1999年度の数字が落ち込んでいるのは、システム更新のため計測のできない時期があったためです。この年は度外視するとしても、2000・2001年度の入館者総数は1998年度を下回っています。2000年度に教職員が減ったのは、学内ネットワークの整備によるところが大きいと思われるのですが、2001年度ではまた増加しました。ヴァーチャルライブラリだけでは物足りないというところでしょうか。

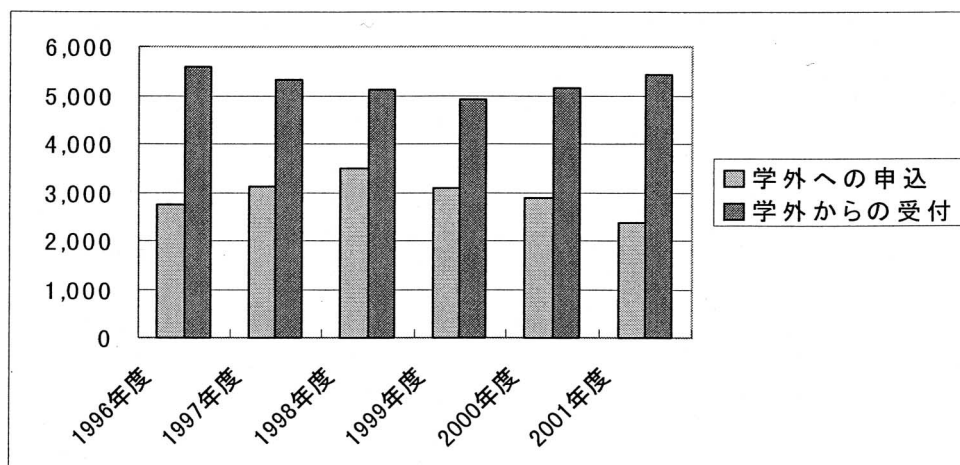
## 2. 貸し出し



	教職員(名)	教職員(冊)	学生(名)	学生(冊)
1996年度	5,777	10,136	7,088	10,327
1997年度	5,686	10,141	7,807	11,474
1998年度	5,879	10,237	7,962	12,042
1999年度	5,670	9,637	8,484	12,473
2000年度	5,273	9,955	10,205	15,556
2001年度	5,864	10,561	10,168	15,422

傾向としては、入館者数の場合とよく似ています。教職員の数字が年ごとにバラつきがあるのは、どうしてなのでしょう。研究方法が年ごとにちがっているのでしょうか。もっとも「教職員」の中には、コメディカルや事務の職員も含まれています。こういう方々の利用がどのくらいあるのかは、はっきりとはわかりませんが、以前より増えていると思われまます。図書館が大学全体から親しまれているとすればうれしいことだと思います。

### 3. 相互貸借



	学外への申込	学外からの受付
1996年度	2,760	5,583
1997年度	3,122	5,319
1998年度	3,502	5,111
1999年度	3,091	4,909
2000年度	2,890	5,144
2001年度	2,375	5,438

学外への申し込みは年々減少しています。ひとつには、オンラインジャーナルの利用が影響していることが考えられます。つまり、パッケージ契約で実際に閲覧できる雑誌タイトル数がふえたこと、製本中や未着による外部依頼が減ったことなどです。それにしても減り方が大きいように思えますが、利用者の方々が独自に文献を入手できる方法をお持ちなのではないでしょうか。申込の減少とは逆に受付の方は増加しています。理由として、国立情報学研究所(NII)のILLシステムに参加したこと、病院図書室からの依頼も積極的に受けていることがあげられます。



図書館全景 (D棟)

大阪体育大学は大阪府の南部泉南郡熊取町にあり、JR阪和線熊取駅からバスで南東方向に15分ほどの緑豊かな小高い丘の上にあります。昭和40年4月大阪府茨木市に大学開学と同時に図書館も設置されました。平成元年大学が現熊取へ全面移転したのに伴い、同年5月に新図書館が開館しました。図書館は熊取学舎D号館の1階部分にあり、2階部分は講義用大教室があります。さらに平成7年4月に増改築工事完成後、新大学図書館として開館し、熊取移転時の約2倍の床面積(約1,000㎡)となりました。この時に閲覧席数210席となりAVブース新設やLAN配線の準備が成されました。平成10年度より図書館業務に丸善社の図書館総合システムCALISを導入し、業務の電算化及びOPACを構築され、貸出業務もコンピュータで行なえるようになりました。また平成13年8月にも、事務室及び閲覧室のOPAC再配置等の改築が行なわれました。

図書館の開館時間は、平日午前9時から午後6時までで、土曜日は午前9時から午後1時までです。休館日は日曜日、祝祭日、開学記念日(6月23日)、創立記念日(11月15日)で、その他夏季・冬季休暇期間等に休館があるそうです。

図書館出入口にはブックディテクションシステムが設置され、手荷物の持ち込みが自由となっています。入口を入ると左手から前方にかけて閲覧席が用意されており、右手方向へカウンター・事務室と続き、OPAC端末があります。OPAC端末の1台はインターネット利用端末を兼用していて、Sport Discus(海外体育系データベース)をオンライン検索できるようにしてあり、またNACSIS-IR等も契約されています。さらにカウンターの向いにはビデオデッキ6台及びビデオテープ架があり、ビデオテープは993タイトルあります。



図書館内(カウンターと閲覧室)

入口から右手カウンター前を通りすぎた先は開架書架となっており、参考図書、指定図書、新着図書の書架が並び、次に新着雑誌架があり、雑誌は2001年3月現在で2,451種受け入れられています。また洋図書・和図書と分けて単行書がNDC分類に従って排架されています。書庫の部分のみ図書館内で2階建て構造となっています。製本和洋雑誌が1階部分に排架されています。2階部分には電動式移動書架が設けられ、紀要類・古い和書・製本雑誌の一部が収められています。図書蔵書数は2001年3月現在で和書83,773冊、洋書32,330冊となっています。

事務室横には教員用閲覧室が設けられ、マイクロリーダーが1台設置されています。主にUMI社制作のスポーツ系の学位論文マイクロフィッシュが、4,040タイトルほどコレクションされています。その他新聞11種、コピー機は4台(内1台カラー機)が提供されています。

平成12年4月には短期大学の開設に伴い短期大学部校舎内に短期大学部分室を開室し、大学図書館と同一のシステムで運用されています。2001年12月現在で蔵書数7,182冊、雑誌63種、新聞5種を備えられています。

図書館のホームページアドレスは <http://lib.ouhs.ac.jp/> です。今後はオンライン雑誌の導入や、ホームページへのリンク等、より一層の教育・研究活動サポートを目指されるそうです。(宮本)





ヒトゲノム計画が動き出してから、まだほんの10年である。たしか一昨年のも分子生物学の講義で「君達が卒業する頃には、ヒトゲノム解析、終わってるかも」と言ったのを憶えている。それが昨年2001年2月にはヒトゲノムの全塩基配列の九割方をやり終えて、長大な論文を発表した。その進歩の凄まじさに正直圧倒された。

著者はこの巨大プロジェクトに参加した日本のチームの中で、指導的な役割を果たしてきた一人である。本書はその経過と成果および今後の課題についてわかりやすく解説している。順を追ってみたい。

「1. ヒトゲノム計画前夜」では生物学に革命をおこした二つの技術として、組換えDNA技術と、DNAシーケンシング技術を挙げている。1980年代後半からこうした技術を背景にして、ヒトゲノム計画の気運が各国で高まって行く。結局はアメリカを中心に進められたが、日本にも先駆的な研究があったことを紹介している。東大の和田昭允教授らによるDNA配列決定自動化装置の開発である。1987年には雑誌「ネイチャー」に自動化にめどをつけたと発表して、世界に衝撃を与えた。ところが途中で挫折する。それを著者は「しかし残念なことに、また不思議なことに」「数年後に打ち切られてしまった」とだけ書いて、何故そうなったかを語っていない。これは理解に苦しむ。ヒトゲノムプロジェクトの中で、日本がアメリカとイギリスの後塵を拝することになる決定的な事件なのだから、もっと具体的に語るべきだと思う。

「2. 遺伝、遺伝子、ゲノム」は分子生物学の用語の解説。

「3. ヒトゲノム計画はじまる」では国際的な協力体制がワトソンらの強力なリーダーシップによって形づくられていく経過が述べられ、その中で日本のチームが国に依存し過ぎたことによる対応の鈍さと研究費不足に苦しむ様子が語られる。しかしそうこうするうちに、セラ社を設立したベンチャーが独自にゲノム解析を立ち上げ、その解析結果を特許で独占しようとして国際チームに挑戦してきた。この動きを著者は科学に反するものとして明確に批判し、その意味から2000年3月にクリントン大統領とブレア首相が「ヒトゲノムの配列は人類共通の財産である」と宣言したことの重要性を指摘している。

「4. 21番染色体全解読」は著者が直接関わり、日本が中心になって進めた研究。そのゲノム解読の正確さが高い評価をえているようだ。確かに解読が正確であることは非常に重要である。私にも経験がある。かつて大腸菌のリボソーム蛋白L35を発見して、そのアミノ酸配列を決めた。その遺伝子を決めるにはアミノ酸配列を遺伝暗号に読み直してデータベースを探索すればよい。やってみると、リボソーム蛋白L20と開始因子3の遺伝子にきっちり挟まれて見つかった。しかしそれまではそこが遺伝子であるとみなされていなかった。何故か。塩基配列に誤りがあったからだ。アデニンをひとつ余計に読んでいたのだ。そうすると遺伝暗号が全部ずれて、全くナンセンスな配列になってしまう。こういう間違いをすると、蛋白の構造が決定されるまでその誤りに気づかない。折角のゲノム解析が役に立たなくなる。おかげで私は蛋白を発見した序でに、その遺伝子をも見つけることができたのだけれど。

「5. ヒトゲノムの全体が見えてきた」「6. 病気のゲノム解析」「7. 遺伝子の働きを調べる」この3つの章は今までにこのプロジェクトで得られた結果を解説している。何とんでもヒトの遺伝子の数がたった3万だったことに驚かされた。大腸菌の7倍、ショウジョウバエの2倍でしかないというのは如何にも少ないではないか。

「8. ゲノム時代の課題」では今後の遺伝子治療や遺伝子診断、倫理問題などに言及している。

本書の中で著者が繰り返し強調しているのは、ヒトゲノム解析は決してまだ完了していないという点である。これも大切な指摘だと思う。2001年2月の発表はあくまでもドラフトシーケンス(概要配列決定)にすぎない。残りの数%をちゃんとやり切ることで初めて有用な配列になるだろう。設定したゴールは2003年の春、あと1年。著者達の努力に拍手を送りたい。

(わだ あきら 物理学助教授)

## 本学教職員著作寄贈

勝岡 洋治（泌尿器科学）

泌尿器腫瘍の画像診断 / 勝岡 洋治他編 金芳堂 2001

奥田 喜代司（産婦人科学）

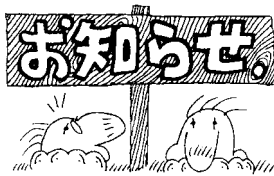
産婦人科内視鏡下手術スキルアップ / 奥田 喜代司他著 Medical View 2002

勝岡 洋治（泌尿器科学）

前立腺肥大症の臨床 / 勝岡 洋治他訳 医学図書出版 2001

宮崎 瑞夫（薬理学）

アンジオテンシン ; 受容体拮抗薬 第3版 / 宮崎 瑞夫他著 医薬ジャーナル社 2002



### 1. 第51期卒業生（平成13年度）が図書を送贈

本学第51期卒業生が図書館に以下の図書を送贈してくださいました。

内科レジデントマニュアル 第5版 他 12冊

### 2. 植木 實教授（三八会）より図書の送贈

植木 實教授が所属される三八会より下記図書を送贈していただきました。

南山堂医学大辞典（第18版） 他 4冊 51,200円

### 3. さわらぎ分室の移転について

さわらぎキャンパスにある図書館さわらぎ分室は、平成14年8月に本館に移転、統合されます。現在、図書、雑誌等の移動作業を準備中です。

これにより、9月以降図書館の利用は、本部キャンパスの本館のみになります。

4. カードを紛失された場合は、図書館カウンターまでお知らせください。再発行します。また、カードを拾われた方は、ご面倒ですが、図書館カウンターまでお届けください。

5. カードの貸し借りはしないで下さい。他人のカードでは資料の貸出はできません。

6. 図書館の入館には、図書館カードが必要です。

図書館入り口の機械にカードを読み取らせることによって入館状況を把握し、図書館サービス向上のための資料としています。必ずカードを機械に通して入館してください。カードをお持ちでないときは、館員に声をおかけください。

### 7. 平成14年度外国雑誌新規購入及び中止タイトル

#### 1. 新規購入タイトル

1) American journal of pathology

2) Journal of pediatric hematology / oncology

3) Leukemia

4) Nature review; genetics with e.j

#### 2. 中止タイトル

本館

1) Clinics in plastic surgery

2) Developments in ophthalmology

3) Environmental research

4) Experimental biology and medicine

5) International archives of occupational and environmental health

6) International journal of gynecological pathology

7) Journal of developmental and behavioral pediatrics

8) Microbiology

9) Nuklearmedizin

10) Ophthalmic and physiological optics

11) Optometry and vision science

12) Psycho-oncology

13) Scandinavian cardiovascular journal

さわらぎ分室

1) Cell

2) Nature

3) Proceedings of National Academy of Science

4) Science

5) Trends in biochemical sciences

### 8. 新規受入雑誌（看護専門学校）

1 ナースビーンズ 4 (2002) +

## 平成13年度図書館統計

平成14年3月31日

### 年間受入図書及び製本冊数

	購入図書		製本雑誌		寄贈図書		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
本館	1,297	289	2,189	1,425	305	44	3,791	1,758	5,549
教室図書	32	4	0	0	0	0	32	4	36
研究費	463	96	0	0	0	0	463	96	559
計	1,792	389	2,189	1,425	305	44	4,286	1,858	6,144
さわらぎ分室	494	3	69	344	3	0	566	347	913
研究費	66	325	0	0	0	0	66	325	391
計	560	328	69	344	3	0	632	672	1,304
合計 +	2,352	717	2,258	1,769	308	44	4,918	2,530	7,448

### カレント受入雑誌数

	購入		寄贈		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	
本館	321	430	832	36	1,153	466	1,619
研究費	17	22	0	0	17	22	39
計	338	452	832	36	1,170	488	1,658
さわらぎ分室	33	49	3	1	36	50	86
研究費	0	6	0	6	0	12	12
計	33	55	3	7	36	62	98
合計 +	371	507	835	43	1,206	550	1,756

### 蔵書冊数

	図 書			雑誌 (所蔵タイトル数)		
	国内	外国	計	国内	外国	計
本館	73,775	73,700	147,475	2,461	1,621	4,082
さわらぎ分室	25,605	24,161	49,766	205	164	369
合計	99,380	97,861	197,241	2,666	1,785	4,451

## 平成14年度図書館合同運営委員会委員（平成14年4月1日現在）

図書館長 清水 章（病態検査学）／基礎系 林 秀行（医化学）、岡田 仁克（第二病理学）／社会系 河野 公一（衛生学・公衆衛生学）／臨床系 北浦 泰（第三内科学）、黒岩敏彦（脳神経外科学）、足立 至（放射線医学）、福田 彰（第一内科学）／学生部 大槻 勝紀（第一解剖学）、玉井 浩（小児科学）／さわらぎキャンパス 岡崎 芳次（生物学）／看護専門学校 城戸 滝江、明田 朋子／図書館 茂幾 周治、崔 照子、松本 玲子

## 図書館業務日誌

平成13年9月

- 13日（木）図書館合同運営委員会（於、図書館会議室）
- 14日（金）平成13年度新CAT／ILLシステム説明会に館員参加（於、京大農学部）
- 20日（木）JCR web版説明会（於、ニューメディア情報室）
- 28日（金）医図協基礎研修会実行委員会（於、京都府立医大）

10月

- 11日（木）図書館合同運営委員会（於、図書館会議室）
- 12日（金）医図協企画・調査委員会（於、天理よろづ相談所）
- 16日（火）ISIセミナーに館員参加（於、大阪国際交流センター）

11月

- 8日（木）韓国図書館員が見学来館（4名）
- 27日（火）大阪大学職員研修会に館員参加（於、阪大本館）
- 28日（水）医図協総務会（於、中央事務局）
- 29日（木）近畿地区シンポジウムに館員参加（於、滋賀医大）
- 30日（金）高知工科大学図書館員が見学来館（2名）

12月

- 3日（月）第一回図書館長選挙管理委員会（於、図書館会議室）
- 6日（木）医図協理事会、評議員会（於、東大医学部）
- 7日（金）医図協分担購入検討委員会（於、東大医学部）
- 13日（木）図書館合同運営委員会（於、図書館会議室）

平成14年1月

- 22日（火）第二回図書館長選挙管理委員会（於、図書館会議室）
- 24日（木）近畿地区医学図書館協議会例会（於、関西医大）

2月

- 7日（木）図書館長選挙公示
- 21日（木） - 22日（金）図書館長選挙
- 28日（木）図書館合同運営委員会（於、図書館会議室）

3月

- 1日（金）医図協企画・調査委員会（於、市大医学部）
- 7日（木）医学情報センター運営委員会（於、第8会議室）
- 18日（月）医図協図書館研究会・継続教育コース実行委員会（於、阪大生命科学分館）

## 編集後記

今回のトップ記事は、この度、新館長に就任された清水教授に、またエッセイは、黒岩教授にお願いしました。21世紀の医療環境のシリーズは11回目です。新年度にあたり、図書館の利用状況等を掲載しました。その他、多くの方々に執筆して頂き、有難うございました。表紙のカットは北村達郎氏に描いて頂きました。今年より館報の発行を年二回にいたしました。読者の方の投稿を歓迎いたします。

（茂幾）

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書館室報」

No.22号 2002年5月25日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社